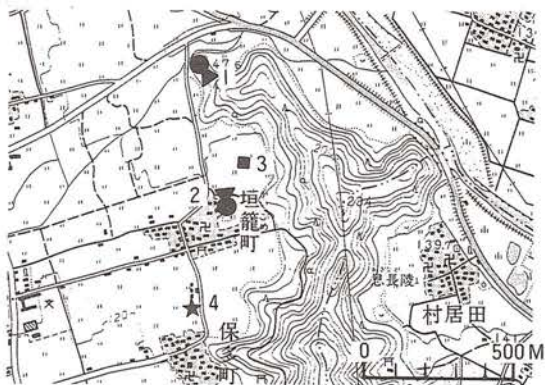


## 240. 長浜市保多町 上寺地遺跡出土埴輪の紹介



1. 茶臼山古墳 2. 垣籠古墳
3. 平成8年度発見の方墳
4. 上寺地遺跡埴輪出土地

平成7年度の県営ほ場整備事業に伴う調査において5世紀前半から中葉（川西編年IV期）の埴輪が出土した。出土地点は長浜市保多町字仮海道で『平成2年度滋賀県遺跡地図』では空白地となっているが、平成8年度の調査において北東約500mの垣籠町字神塚で一辺約8mの方墳が検出されており、その周溝内から同型式と思われる円筒埴輪が出土していることから、上寺地遺跡の範囲内であると考えられる。

上寺地遺跡は横山丘陵の西側に位置し、付近には茶臼山古墳・垣籠古墳・山ノ鼻古墳・龍ヶ鼻古墳群などが存在する。平安時代の寺院跡として周知されてきたが、平成6・7年度の調査で弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴住居等が検出されている。旧流路等から平瓦等も出土しているが、現在までのところ直接寺院跡として確認できる遺構は検出されていない。

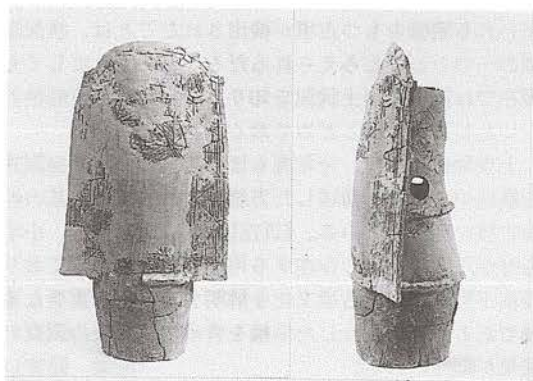
埴輪は、田面区画工事に伴う試掘調査トレンチT134から出土したものである。試掘調査という調査の性格と古墳の周溝内に落ちこんだ遺物であろうという調査者の予断からその大半を取り上げてしまったため詳細な出土状況の報告は困難であるが、墳丘規模の確認のため再度掘削を行ったところ、埴輪は長軸約1.5m、短軸約1.0mの隅丸方形の土壇からの出土であり、古墳に伴うものではないことが確認された。検出面からの

残存する深さは約0.15mを測るが、埴輪の出土したレベルを考えると少なくとも0.3m以上の深さがあったと考えられる。

出土した埴輪は、現在報告書刊行に向けて整理作業を行っている最中であるため以下に記す埴輪の種類・個体数は今後訂正の可能性があるが、その総量は収納用コンテナ約10箱を数える。現在確認されているものは無黒斑の、円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪等で、須恵質のものが多く含まれており、窯によって焼成されたものであると考えられる。

円筒埴輪は、少なくとも10個体以上の存在が確認されているが、そのうち5個体がほぼ完形に復元された。3突帯4段構成で2・3段目に円形の透かし穴をもつものと、4突帯5段構成で3・4段目に透かし穴をもち、口縁部外面に粘土帯をめぐらすものの2種類がある。後者は3～5段目に朱が施されているが、今のところ前者のタイプでは確認されていない。また、復元された5個体すべてにヘラ記号が確認される。「多」・「夬」・「𠄎」の3種があり、「𠄎」のみ複数確認されていて3突帯4段構成・4突帯5段構成の両方に存在する。製作時の原形を保っていると考えられるものは1個体のみで、他は焼成時に大きく歪んでおり、粗悪品である。

朝顔形埴輪は、4個体以上あるが、復元されたのは壺部の口縁のみである。頸部の破片も何点か確認されているが、口縁部はほぼ1周するのに対し、それ以下の部位についてはほとんど確認できないことから、当初から口縁部のみ存在した可能性がある。内外面とも朱が施されるが、3個体がほぼ原形を保つのに対し、



盾形埴輪



残りの1個体は歪んでいる。

盾形埴輪は1個体出土しており、ほぼ完形に復元されたのは長浜市内では初めての例である。3突帯4段構成の円筒埴輪とほぼ同程度の器高しかなく、盾形埴輪としては小型品である。外区には鋸歯文が刻まれ、内区には菱形文が充填されるが、内区は3列しか文様帯がないため、左右対称にはならない。盾面にのみ朱が施される。

蓋形埴輪は立ち飾りの一部が出土している。他にも円筒埴輪とは考えられない破片が何点か出土しているが、どのような形態をもつものか確認できていない。

以上、上寺地遺跡出土の埴輪について現在までの成果を紹介した。これらの出土埴輪をどのような性格のものとしてとらえられるかについては現在検討中であるが、若干まとめてみたい。

上寺地遺跡出土埴輪についてまずいえることは、古墳に伴うものではなく、土塚状遺構からの出土ということである。遺構内に配置される、あるいは廃棄される以前に古墳に樹立されていた可能性を100%否定することはできないが、ほぼ完形に復元された5個体の円筒埴輪のうち原形を保つものは1個体のみで、残りは焼け歪んだいわゆる不良品であること、また朝顔形埴輪は4個体が口縁部のみ1周するのに対し頸部以下の破片がほとんど存在せず、その中に1個体の不良品が混じっていること等から、古墳に樹立されていた可能性は極めて低いと考えられる。しかし、埴輪窯で焼成された後、出土地まで運ばれたことは確実である。では何のために運ばれたのか。

ひとつの可能性としては、土塚状遺構からの出土であることから、埴輪転用棺としての使用が考えられる。ただ円筒埴輪の口径は、成人を納めるには狭く、子供を納めるには出土量が多いと思われる。もう1つの可能性として考えられるのは、窯場での選別には通ったものの、古墳に樹立される際に不良品として廃棄された、いわゆる二次選別によりふるい落とされたということである。今年度の調査で字神塚の地から同型式と思われる埴輪をもつ古墳が検出されたことは、状況証拠の一つとしてとらえられるだろう。いずれにしても、現在では詳細な出土状況を知りえないため、可能性の一つとして示すにとどめておく。

上寺地遺跡では、今年度もほ場整備に伴う発掘調査を継続中であり、前述した方墳を含めて既に2基の埋没古墳を発見している。『近江国坂田郡志』にも、小字名等から埋没古墳の存在する可能性が指摘されており、長浜平野における古墳文化を解明するうえで重要な遺跡である。今回紹介した埴輪を含めて、今後の調査の成果が期待される。

(稲葉 隆宣)

## 241. 小川原遺跡出土の楔形石器について

### — 縄文時代後期初頭にみる技術革新の可能性 —

小川原遺跡は、滋賀県犬上郡甲良町に所在し、縄文時代後期初頭に帰属する、数十基の配石遺構を検出した西日本有数の遺跡である。今回は、正報告に先立って、同遺跡において確認された石器、特にいわゆる‘楔形石器’について、若干の事実報告をしたい。

筆者は以前‘楔形石器’について、「いわゆる階段状剥離は‘使用’によって生じたものである。」という前提条件を設定した上で、「楔形石器は‘使用’によってその長幅サイズの縮小化が進み、最終的に長幅2~3cm前後の大きさになった時点で放棄(あるいは廃棄)される」という仮説を提示した。<sup>⑩</sup> なおこの仮説は、あくまで縄文時代中期初頭に帰属する粟津第3貝塚出土の楔形石器の観察に根拠をおいて設定したものであった。

さて、小川原遺跡出土の楔形石器および関連資料の内、典型的な資料の一部の実測図(図1)を掲載し、以下にその特徴等を簡単に示す。なお、遺物に付した番号は、発掘調査時の取り上げ番号である。

804・621・824・1232・435は、楔形石器である。対向する2側縁(あるいは全側縁)に、階段状剥離を留めている。804は、粟津第3貝塚出土の資料に類似するものであり、側面にファシット状の剥離痕を留めるという属性を有する。824・1232は、明らかに折断(切断)剥片を素材として用いている。

1606・611は、小川原遺跡の正報告では、‘楔形石器から剥落した剥片(仮称)’として新たに器種設定する資料である。いわゆる両極剥片として分類される資料に類似した属性を有している。いずれも、背面上端に階段状剥離を留める。なお、その詳細については、小川原遺跡の正報告において述べる予定なので、そちらを参照されたい。

951・1526は、いわゆる折断(切断)剥片の範疇として理解しうる資料である。951は、粟津第3貝塚出土の資料(同報告においては刃部再生剥片として提示)に類似する資料である。

今回図化した小川原遺跡出土の楔形石器は、基本的には前述の仮説に沿うものとして理解ができる。さらに、この仮説を補足しうる資料として、長幅5~6cmをこえるような、大形の楔形石器(図1:435、側面にファシット状の剥離痕を留めていない)が存在する点も、興味深い。

その一方で、若干再検討しなければならない点、すなわち縄文時代中期初頭の粟津第3貝塚出土の資料においては、認められなかった状況も確認している。粟津第3貝塚出土の楔形石器は、その素材が残核ある

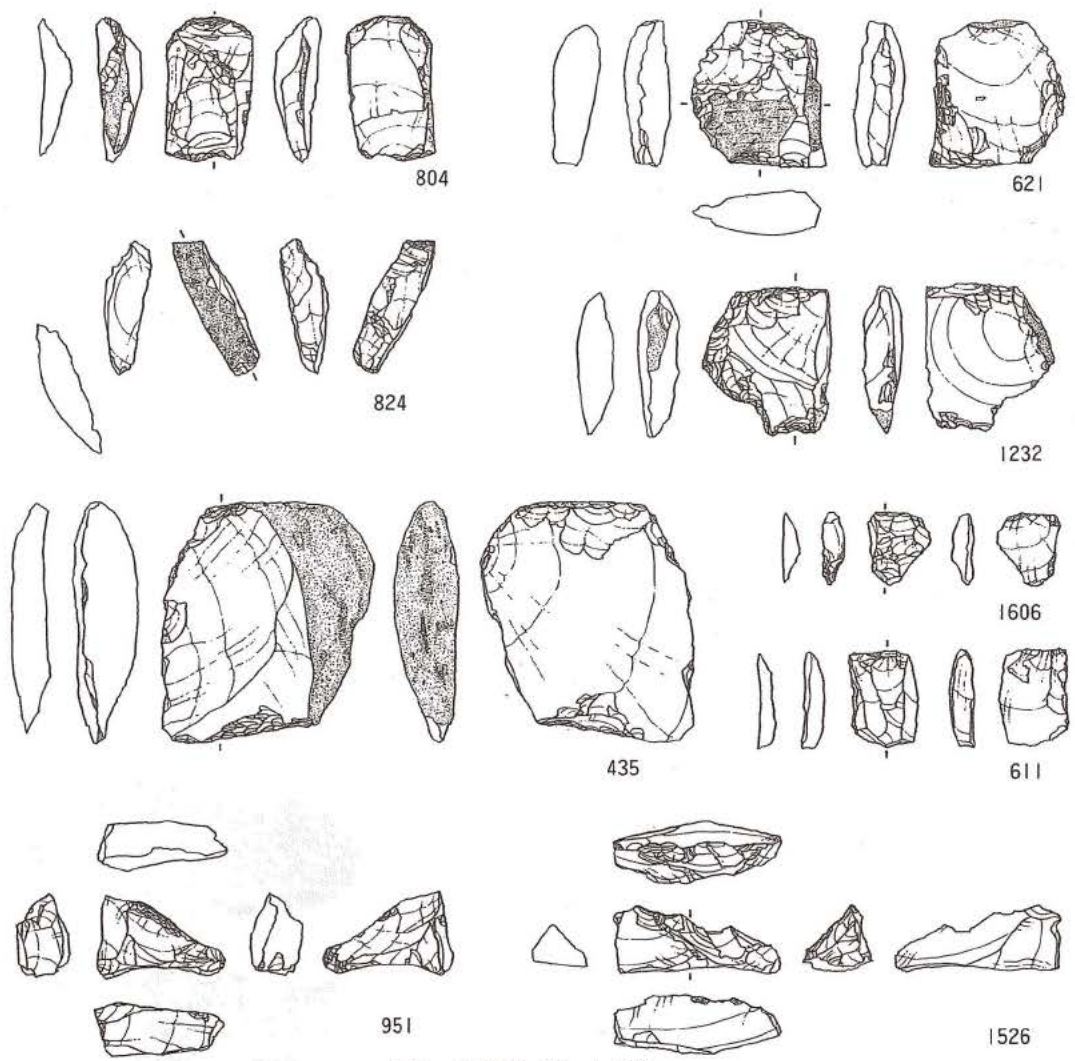


図1 実測図 (S=1/2)

いは剥片である場合を想定したのであるが、小川原遺跡出土の楔形石器においては、さらにいわゆる折断(切断)剥片(再生剥片あるいは作出剥片等を含む)を素材とするものが一定量存在するのである。

この折断(切断)剥片を石器素材として用いる傾向は、縄文時代後期初頭には、楔形石器だけでなく、他器種においても一般的に見られるようであり、またこの傾向は、この時期以降、弥生時代中頃までは比較的顕著に認められる。さらに、この縄文時代後期初頭という時期は、他地域においても‘道具’全般の様相が変化を見せる時期であることが、度々指摘されている。この点を考慮すると、この縄文時代後期初頭(の前後)に、何らかの技術的な変革が起こったことを想定すべきであろう。

この技術的な変革が、何に起因するものなのかとい

う点については、現時点では、筆者自身その解答は得ていない。なぜなら、粟津第3貝塚と小川原遺跡とは、帰属時期も違えば、立地条件も異なるし、さらに言えば、その両地点に残された諸活動の痕跡(遺構等)の様相も一致しないからである。ただ忘れてはならないのは、楔形石器の観察からだけでも、時空を越えた共通点と相違点が確認されるということであり、この点は評価しなければならない。それぞれが何に起因して生じた現象であるのかは、今後の課題としておきたい。

(鈴木 康二)

註

- ① 鈴木康二 「廃棄を考える」『紀要』9号  
 (財)滋賀県文化財保護協会 1995



## 242. 湖北町大塚古墳群

だいづか

大塚古墳群(図1の1)は滋賀県東浅井郡湖北町上山田地先の山田山南麓に所在する。南西側約500mの小谷山北麓には『文化財だより』№199で報告した大岩古墳群(図1の2)がある。滋賀県教育委員会発行の『平成7年度滋賀県遺跡地図』(以下『地図』)によると、大塚古墳群は「円墳10基、横穴式石室」とされるが、現地踏査を試みたところ、現状では尾根上に2基とその北東側の竹林内に1基が確認されるにとどまった。前者の2基は大岩古墳群と同等規模の小規模な円墳で、墳丘上には南側に開口する長形状の凹部があり、横穴式石室の存在を示唆している。斜面に築造されているので、平地側からみると実際よりもかなり高い盛土がなされているかのような印象を与える。後者の1基は石室のみが露出したかのような状態にある。

以上の3基に加えて、昭和48年頃までは尾根に続く南側の水田中に、この古墳群中では最大規模の古墳1基が存在していた。地元の古老の記憶によると、墳丘は円形を呈していたらしいが、盛土はかなり流出していたようで、墳丘上には3畳敷きくらいの方形の石があり、大人がひとかかえする程の石材も五十数個はあったという。明治30年頃には墳丘の北東側に開けられた「穴」から「カワラケや刀など」が出土し、子供の頃は「穴」から石室内に入出入りできたという。

図2および写真1に示した須恵器は、この消滅した

古墳から出土した。坏蓋1の法量は口径11.7cm、器高4.1cmを測り、坏身2は受部径12.2cm、器高4.0cm、高坏3は受部径12.2cm、脚部底径7.2cm、器高6.1cm、碗4は口径11.2cm、器高5.8cmを測る。碗4の底部は丁寧へラケズリし、坏身1・坏蓋2の天井部および底部は不調整である。これらの須恵器は正式な発掘調査によって出土したものではないが、一応ここでは蓋坏の法量に注目してTK209並行期を中心に考え、大岩古墳群とほぼ同時期か、やや新しい時期と想定したい。

今後とも周辺地域の踏査を続けたいが、四郷崎古墳群(図1の4)と二俣古墳群(図1の5~7)について若干の知見を得たので報告しておきたい。まず前者については『地図』に示された古墳群の東側で、横穴式石室が露出した状態にある古墳1基(図1の3)を新発見したということである。後者については『地図』に示された石塚古墳を野上塚古墳(図1の7)と訂正し、これと天神塚古墳(図1の6)の中間位置に二俣古墳(図1の5)を示して、石塚古墳とするのが正しいということである(『ほ場整備事業にともなう文化財調査報告II』滋賀県教育委員会1975)。(北村 圭弘)



図1 大塚古墳群等の位置

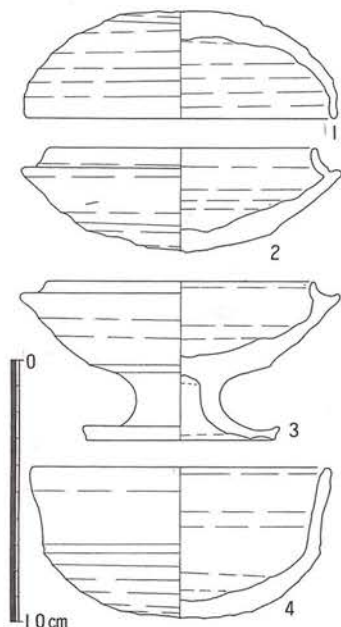


図2 大塚古墳群出土の須恵器  
(S=1/3)

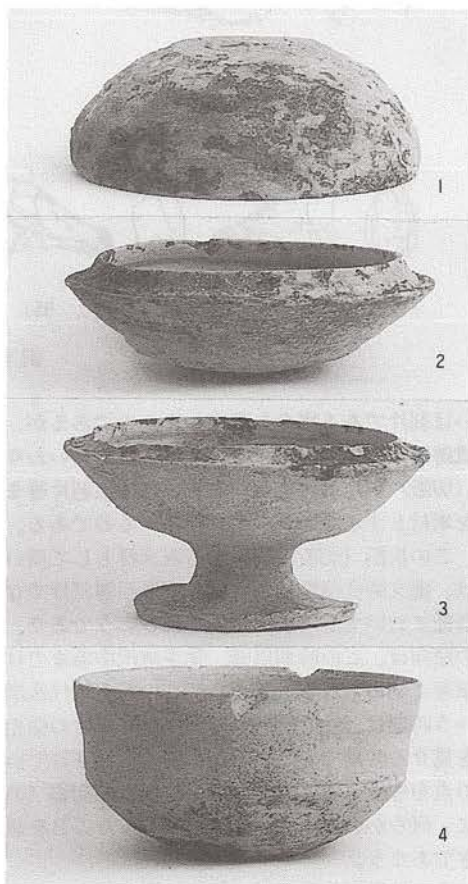


写真1 大塚古墳群出土の須恵器